

*** 今日の健康（8月）***

< 老衰死 >

日本は65才以上の高齢者が3千万人を超え、日本は世界に先駆け2007年に超高齢社会となりました。

超高齢社会とは、65歳以上の人口の割合が全人口の21%を占めている社会を指します。高齢化の進行具合は65歳以上の人口が全人口に対して7%を超えると「高齢化社会」、14%を超えると「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」と表現します。

高齢化率は先進国で高く、発展途上国では低くなる傾向があり、高齢化率が高い国としてはスウェーデン、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ合衆国などが挙げられますが、日本の高齢化率はこれらのどの国よりも高いです。



医療の進歩とともに長寿社会となっている日本で増え続けているのが「老衰死」です。戦後一貫して減りつづけた老衰死の数は、高齢者人口の増加とともに10年前から急増し、2014年には75000人を超えて、統計を取り始めて以来過去最高となっています。最後まで徹底した治療を行うことよりも自然な死をうけいれるという考え方の広がりがあるとみられています。

先ごろ発表された厚生労働省の「平成30年（2018）人口動態統計月報年計（概数）の概況」によると、平成30年に亡くなった人の死因ランキングで老衰が死因の第3位になったことが明らかになりました。

死因別にみると、死因順位の第1位は悪性新生物<腫瘍>（全死亡者に占める割合は27.4%）、第2位は心疾患（高血圧性を除く）（同15.3%）、第3位は老衰（同8.0%）となっており、死亡者のおよそ3.6人に1人は悪性新生物<腫瘍>で死亡しています。

厚生労働省平成31年度死亡診断書（死体検案書）確定マニュアルによると、老衰とは死亡診断書（死体検案書）に書く老衰を「死因としての「老衰」は、高齢者で他に記載すべき死亡の原因がない、いわゆる自然死の場合のみ用います。」とされています。

100歳以上の長寿者の死後の病理解剖で全員に死因として妥当な病気として敗血症16例、肺炎14例、窒息4例、心不全4例等を診断したとの報告があります。超高齢者では高齢が原因として背景に有り免疫機能の低下、嚥下・喀出機能の低下による誤嚥性肺炎や致命的な感染症に陥りやすく、何か原因があれば老衰死とは診断されませんが、高年齢による自然死との間に因果関係がないとは言えないと考えられます。

今回の老衰死第3位の統計をきっかけに、老衰とは、死とは何か、皆が考えるきっかけになることを期待したいと思います。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏